

令和3年度（2021年度）洗堰上流の瀬田川における

チャンネルキャットフィッシュの生息状況

石崎大介・田口貴史

1. 目的

近年、県内において特定外来生物チャンネルキャットフィッシュの確認数が増加し、瀬田川洗堰上流の瀬田川（以下、瀬田川上流）や琵琶湖南湖においても生息が確認されている。適切な駆除を行い、琵琶湖への拡散を防止して未然に漁業被害を防ぐため、生息状況を把握した。

2. 方法

2018～2021年に瀬田川上流で延縄調査を実施した。調査は2018年7～8月に5回、2019年3～12月に17回、2020年3～11月に14回、2021年3～12月に11回実施した。幹縄約500mに60本の枝針（ハリス：ナイロン7号、針：ムツ針11号ないし14号）を備えた延縄を用いて1回の調査で針数240～360本を設置し、翌日引き上げた。エサは冷凍のアユを用いた。調査日ごとに採捕された本種の針100本あたりの個体数を算出し、CPUEとした。また、2019年4～11月に33回と2020年6～11月に13回、2021年5～11月に30回、同水域で実施された滋賀県漁業協同組合連合会による延縄による本種の駆除データについても同様にCPUEを算出した。CPUEの月平均を求め、年ごとに比較した。またこれらにより採捕された本種の標準体長を調査年の間で比較した。

3. 結果

CPUEは、2019年は8月まで低い値を維持していたが、9月に大きく上昇した（図1）。これは体長200mm程度の同水域で繁殖したと考えられる幼魚が大量に採捕されたためである（図2）。2020年は当初これらの幼魚が引き続き採捕されCPUEは高かったが、9月以降は

急減し、2021年6月までほとんど採捕されなかった。しかし、2021年は7月に急増し、10月まで比較的高い値を示した。2021年7月以降採捕された個体は体長200mm程度の幼魚が多かった。一方、2020年7月以降採捕された個体の体長のピークは300mm以上350mm未満であり2019年や2021年と比較してやや大型であり、採捕個体数も少ない。このことから、2020年は新たな幼魚（2019年生まれ）の発生はなかったか少なかったと考えられる。

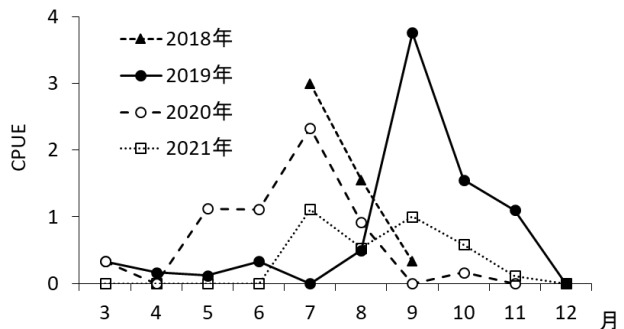


図1 各年のCPUEの月変化

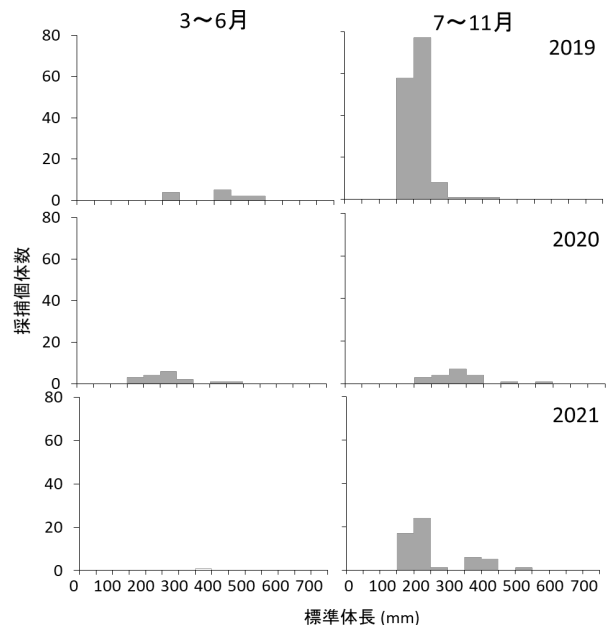


図2 各年の体長比較